

興味、好奇心が 地域課題の解決につながる



どうすれば若い世代が市政に興味を持ってくれるか。公共政策がご専門で長年、安中市総合計画の策定に関わっており、市の行財政の課題について検討されている群馬大学の小竹裕人教授に、今回の取り組みについてお話を伺いました。

近年、若者の行政や市政に対する関心の薄さが、報道などで取り上げられていますが、どのような背景が考えられますか

行政への関心の薄さは、やはり選挙の投票率などから見ても感じます。

原因の1つとしては「投票に行ったから、それがどのように自分に返ってくるか」がわかりにくい、ということはあると思います。自分たちが声をあげた結果が想像できないと、声もあげにくい。そこが一番の問題かと思います。

そのような問題も含め、今回の高校生ワークショップについてどのような印象を受けましたか

前向きで良いな、と思います。彼らは10年、20年後には社会を動かす立場になっていく。その若者の思いを理解するため、ぜひ声をあげてもらいたい、だからそのための場を作る、これは良いことと思います。

「自分の意見も聞いてくれる」という期待が持てれば今、まさに生活している若者を安中市につなぎとめる効果にもなると思います。

小竹先生は現在、市が進める総合計画審議会の会長でもありますが、若者の声を総合計画に生かすという取り組みをどうとらえますか

安中市が抱える地域問題に、若者が興味をもつきっかけになると思います。また、総合計画の中に「若者

はこういう意見を持っている」という記述も入れた方が良くとも思います。だれが言ったかわからないように織り込んで、何となく計画の中に入るより、「若者はこう言っている」という記述を返すことで、自分たちの意見がとおったと成功体験のような、見える形で反映させることは重要だと思います。

このワークショップをとおして、高校生が何か関心や手ごたえを感じたとすれば、それを維持するために行政はどのような後押しをするべきでしょうか

大切なのは違う世代といろいろな話ができること。自分が思っていることは、違う世界、世代から見るとこう見えるんだ、ということを確認できる場が必要だと思います。

行政としては「シチズンシップ教育(※)」を強化することが必要でしょう。地域課題を意識し自立した市民になり、将来の安中市を担ってもらうためには必須だと思います。

自分の周りで起きていることを理解し、でも違う世代から見れば「その論点もあるかもしれないね」ということも認識できれば自分のふところも広くなるし、人間性も豊かになるかなと思います。

最後に、未来の安中市を担う若者たちにメッセージをお願いします

何かに興味を持ったなら、ただ待つだけじゃなくて、自分から調べに行くような好奇心がほしいですね。遊園地のように「楽しませてもらうことを楽しむ」のではなく、自分で楽しさを見つけてほしい。そうすれば、地域の良い面、悪い面への観察眼が出てくると思います。

不思議だと思ったら調べる、実際に見に行ってみてほしい。それが、その地域課題の現状を把握するのに役立ちます。それは決して楽しいだけではなく、つらい社会問題の現実を突きつけられるかもしれない。でも、都合の良い現実だけではなく、本当に都合の悪い現実もしっかり受け止められる、そんな人間性をぜひ身につけてほしいと思います。



小竹 裕人さん プロフィール
群馬大学情報学部教授。専門分野は公共政策論(経済学)、政策評価。

※社会の一員として自立し、権利と義務の行使により、社会に積極的に関わろうとする態度を身に付けるため、社会形成・社会参加に関する教育のこと